

閉会の挨拶

石川工業高等専門学校 校長
村本 健一郎 氏

本日は、四人の先生方にお話をいただきました。それぞれの違った立場からの四人の先生でした。

最初の潮田先生は、アメリカの生活が長いということから、リベラルアーツをベースとした理工学の専門教育が必要だということ、また、ディスカッション、特にインタラクティブなディスカッションの重要性ということをお話されたと思います。今日、何とか“力”ということで、“コミュニケーション力”や“人間力”と言われている中で、さらに、“雑談力”というものも評価されるようになってきているとのお話であったと思います。

次に、日本工学教育協会の剣持先生は、大学の大衆化に伴って、“後姿教育”から“水飲ませ教育”への転換の必要性があるというお話であったと思います。

私は、5年前まで金沢大学に在職していたのですが、そこでちょっと、ギクリとしたのが、大学で教授になった人は論文をたくさん書いた人であって、研究者としては優れているかもしれませんが、教育者としてはどうなのだろうというお話がありました。それは実感として私も思っております。

福井大学の橋本先生は、大学の工学教育についてのお話で、昭和26年頃の大学の工学教育についての課題が、現在も今日的な課題でもあるというお話が非常に興味深く感じました。また、現在の大学生が勉強しないということについてお話がありましたが、平成24年8月に中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」と題する答申を行い、その中で「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」という一節があり、アクティブラーニングという言葉が用いられるようになりました。これを受け、全国の大学は色々と取り組んでいる最中であるとの思いを新たにしました。また、お話の中の、昨年の福井で開催されました年次シンポジウムの時に、澁谷 進氏がお話しましたが、石川高専では技術振興交流会(企業協力会)がありまして、その会長を澁谷 進氏にお願いしておりまして、いつも叱咤激励をいただいております。

アルスコンサルタンツ株式会社の大深先生は、ご自身の長い企業経験に基づいた工業技術、あるいは

工学教育について、大変説得力のあるお話をいただきました。

石川県には工学系の優れた高等教育機関があり、金沢大学、金沢工業大学、北陸先端科学技術大学院大学がそのビッグ3です。それに加えて本日出席されております金沢高専、さらに石川高専も含めて、地域全体として工学系への関心が高いと思っております。

全国的に少子化と理科離れにより理系へ進む学生の減少が問題になっている中で、石川県では小中学生がものづくりに関心が高い地域であると思っております。

全国の各県にはほぼ1校ずつ高専が設置されているのですが、石川県にある石川高専は今のところ志願者の確保に苦労はありません。他県の高専と比較すると志願者が多くて安泰ということですが、これは、石川県は1900年代から織機に始まるものづくりに関わる企業が多いということに加えて地元の工学系の高等教育機関がそのような雰囲気盛り上げているということによると考えられ、大変嬉しく思っております。

今、私が若者に対して気になっておりますのは、先ほども少し出ておりましたが、信州大学の山沢学長先生の平成27年入学式挨拶における「スマホをやめますか、それとも信大生やめますか」というお言葉です。どこの統計でも、中学生・高校生のスマホあるいはインターネットの利用時間が非常に長く、いつ勉強しているのかと非常に気になっております。大学あるいは高専の立場から見ると、そのような仮想空間、バーチャルなところへ若者が行かないように大学の実際の教育に興味を持って、現実の方が面白いという、授業の面白さ、大学・高専で学ぶ事の面白さを学生に伝える義務があると私は思っております。

最後になりましたが、本日のこのようなバランスの良い、多方面から様々な立場の講演者による大変有意義なご講演に感謝致しますとともに、本シンポジウムを企画していただきました金沢工業大学の石川学長先生に御礼を申し上げまして、私の閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうも有難うございました。